



7月号

ひだまり

今月のエッセー

直筆の力



七月は別名文月。文月という名は七夕にちなんで短冊に歌や字を書いて書道の上達を祈ったことに由来するそうです。最近私は手書きで字を書く機会がめつきり減りました。以前は書道を習っており、少しでも字がうまくなりたいという思いもありましたが、ゆつくりと時間がとれず筆から遠ざかっています。また、講演会など人から話を聴く時にはメモを取り、たくさん字を書きますが、その他はもっぱらパソコンを使って文字を書くことが多いので段々と文字を書くことが億劫になっていきます。

先日、古本を古書店から購入すると、

私たち、こんなことしています！

日常の研修風景より

『パネルを使って布教』



私達は、毎年三月頃に展示パネルを使って仏教を伝える企画を催しています。毎年テーマを変え、一から作り上げていくのは想像以上に骨の折れる作業です。しかし、「仏教」を多くの人に伝えたいという思いの下、一致団結して一つの企画を完成させることは私達の大きな喜びにもなります。



一階展示室の風景



正面入り口の案内パネル

昨年度のテーマは「坐禅」。お寺は敷居が高い、興味はあるけど今まで機会がなかった、などの声を取り入れ、初心者の方が気軽に「見る・知る・参加することのできる場を設けました。会場の一階は展示物、地下は坐禅体験の場。今回は非常に多くの方に来ていただき、大成功！？でした。また今年度もはりきって開催したいと思います！

◆大澤香有
おおくさわこうゆう

編集後記



七月を向かえ夏も本番。私はこの暑い夏の季節が一番好きです。キンキンに冷やした素麺を食べながら高校野球を見る。窓を全開にして、蚊取り線香の優しい香りを感じながら寝る。私にとって幸せいっぱい季節です。そして何といっても夏と言えばお盆です。私の故郷である島根県では、この時期になると全国から帰省してくる人たちが町中が賑やかになります。同級生や親戚が集まり、思い出話をするのも夏の楽しみのひとつです。みなさんも夏ならではの楽しみを見つけて、暑い夏を楽しく乗り切ってくださいませ。

◆堀江紀宏
ほりえきこう

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

ちよつとした手紙が直筆で添えられていました。

「お届けした本が寺門様にとっての『大切な一冊』になれば嬉しいです。これから梅雨空が続きますが、健康には充分ご留意下さいませ。」

この本の購入価格はたったの二百五十円でした。この手紙を書く労力を考えると割に合いません。インターネットを経由して購入したため、この書店がどこにあるのか、手紙を書いて下さった方がどんな方なのか全く分かりません。しかし何よりも、大切に本を読んで欲しいという思いに胸を打たれました。こうした手紙をもらうことは滅多にないので、とても心に響きます。

今や手紙は携帯電話、インターネットでのメールになり、直筆で書くことも少ない気がします。失敗したらやり直さなければならぬ緊張感がありません。

段々と便利にはなっていますが、少し寂しい気がするのです。今、書いているこの文章もいつその事、手書きで書けば私の思いがより一層伝わるのではないかと強く感じました。

◆寺門典宏
てらもんけんこう

法のお話



一年度
畔柳公潤

『月と陰と私』

私がまだ大本山總持寺で修行をしている時です。ある老師がこんな句を教えてくださいました。

松陰の暗きは月の光なり

「月が明るく光れば光るほど、松の陰ははつきりとしてくる。それと同じように、仏様の教えを受ければ受けるほど、いつそう自分の至らないところや汚い部分が見えてくるものです。その時にしっかりと自分の陰(悪なる自分)を見なさい。その陰に気付いたならば、夜空にいつそう輝く月(善なる自分・仏道)にも気づくことが出来るでしょう。」

曹洞宗総合研究センターへ入所し、早いもので四か月が過ぎようとしています。意気揚々と入所した私ではありますが、仏教を学べば学ぶほど、その奥深さに溺れそうな思いがします。その度に私はこの句を思い出して、いかに自分の精進が足りないかを自覚し、自身を見つめ直さなければと思い起こします。

私たちは、普段生活をしていて調子の良い時には物事は順調に進み、気分も良くなって人に対しても優しくなれるものです。

しかし、ひとたび調子が傾いてくると、物事は上手くいかなくなり、気分も落ち込み自分の嫌な所ばかりが目につくようになってしまいます。もがいても、もがいてもこの苦から逃れられないと不安になってしまふ。そんな心情ではなかなか他人に構ってられず、自分のエゴで人を傷付け、自身さえも傷付けてしまうことがあります。

こんな風に、私たちはとても不安定な存在なのです。その時々で、善くもなれば悪くもなってしまう。しかし、その

善くも悪くもなる自分をしっかりと自覚し、受け止めること。それこそが大切だとこの句は説いているのです。

自分は悪を為すかもしれない、至らない部分があるかもしれないと、そういう自分の陰(悪)を見つめることが出来たなら、自分の思う正義を押し付けること(わがまま)に歯止めをかけられるのです。そうして人は、謙虚になることが出来るのではないのでしょうか。

私たちは時に、「人は清く、正しくあるべき存在なんだ」と決め込んでしまうことがあります。だからこそ、そうなれない自分を卑下したり、そうでない他人を憎んだりしてしまいます。しかし、月の光がなければ陰ができないように、私たちも、善と悪どちらを欠いても成りえません。善くあるうとするからこそ悪も見え得るのです。

善い自分も悪い自分も、己のありのままの姿を見つめ、自分を大切にすること。それは自分を認めてあげられることであり、延いては、他人を大切にできる自分へと繋がっていくのです。

身近な仏事

『お盆』



お盆は七月十五日(地域によっては八月十五日)前後、ご先祖さまの精霊を家にお迎えしてご供養する期間です。

お盆の起源はいくつか挙げられますが、ここではそのひとつをご紹介します。ある時、お釈迦様の十大弟子の一人である目連尊者が、あの世で苦しんでいる母親を救おうとお釈迦様に相談をしました。するとお釈迦様は、七月十五日に僧侶たちに食事を供養し、その功德を母親に手向けるようにと教えられました。目連尊者がそのお示しの通りに僧侶たちに食事を供養したところ、母親は苦しみを離れて極楽に往生したということです。この話が日本に伝わる中で、お盆はご先祖様にご供養するものと解釈されるようになっていきました。

年に一度のこの期間。亡きご先祖さま方に思いを巡らし、そのご恩に感謝する機会としたいものです。



仏壇の様子



◆羽賀孝行

ひだまり寺社巡り



東京都台東区浅草

『浅草寺』



雷門で有名な浅草の浅草寺ですが、その歴史は古く、なんと一千四百年前の飛鳥時代から続く由緒あるお寺です。

伝説では六二八年、二人の漁師が隅田川で漁をしている時に、御本尊の観音様を引き上げ、それを知った地元の豪族が、自宅にお祀りしたのが始まりと伝えられています。鎌倉時代に入ると將軍の帰依を受け、多くの武将から信仰を集めました。この頃から、荘厳な伽藍も作られるようになりました。江戸時代には文化の中心として大きく繁栄し、徐々に今の形へと変わってきました。

御本尊の聖観世音菩薩は絶対秘仏と呼ばれるもので、拝見することは出来ませんが、毎年十二月一日に「お前立ち」と呼ばれる代わりの仏様を拝むことができます。浅草寺では、一千年にわたり人々を見守り続けてきた仏様の慈悲を感じることが出来るでしょう。

◆中野太秀